

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	呼吸器をつけることを選択した A L S 利用者の「自分らしく生きる」を支える
演者名	唐澤 美奈
所属	訪問看護ステーションみどり

【目的】

A L S 告知時から、呼吸器はつけないと決めていた A 氏が、呼吸器を選択した。「穏やかに過ごす」ことから「自分らしく生きる」に変わった瞬間だった。「自分らしく生きる」ことの大切さ、「生きるを支える」取り組みを報告する。

【症例】

A 氏 70 歳代男性。元英語教諭。A L S 告知時、担当医から呼吸器はすすめないといわれていた。A L S について様々な文献を読み知識あり。呼吸器はつけないと本人の強い意志があった。訪問看護開始時、I V H、夜間のみバイパップ。ベッド上寝たきり。急変し、妻がとっさにつけたバイパップがはずせなくなる。意欲なく、何か提案しても首を横に振り、死の恐怖や不安からか、妻が 24 時間つきっきりな状態だった。在宅医より、丁寧な説明、可能性の提案あり、気切・呼吸器を本人が選択。決断後、A 氏は生き生きとした表情に変わった。

【実践】

呼吸器でも…「大きいお風呂に入りたい」「コンコードが飲みたい」「リハビリしたい」

- ① 家を支える訪問サービス中心から、外との交流をもてる通所サービスの可能性→小規模多機能利用開始(外出、交流、入浴、リハビリ)
- ② 気道・食道分離術の可能性→在宅医が、長野県内で行ってる病院を探し、大学病院につなげられた
- ③ 元教師。教えることへの可能性→看護学生の実習を積極的に受け入れている

【考察】

私達、医療従事者は、呼吸器装着者に対し Q O L の制限をしがちである。A 氏の生き生きと通所サービスに通う姿、学生に A L S を伝える姿をみて、スタッフも生きるパワー、そして広がる可能性を感じている。A 氏の言葉「A L S についていろいろ調べたが、呼吸器をつけたらどうなるかの文献はなかった。今は呼吸器をつけてよかったと思っている」。呼吸器をつけた場合どうなるか可能性の提案も必要であり、そしてどちらを選んでも「その人らしく生きる」を支え、可能性に応えられるように力をつけていきたい。